
エルフの少年と獣人の女の子

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルフの少年と獣人の女の子

【Zコード】

Z2558Y

【作者名】

ハル

【あらすじ】

よくある異世界転生をして、目が覚めると異世界でエルフだった。親から悪魔の子と言われ、捨てられ、一人で生きていく決心をする。そんなエルフの少年は獣人の女の子と出会う。異種族差別の激しい世界で、エルフの少年と獣人の女の子が助け合って生きていく話です。プロローグの最後の方で主人公の話があるので、プロローグから読み始めることをお勧めします。

プロローグ 旅立ち

「あなたは死にました」

俺の目の前で小学生ぐらいの女の子が、無駄に大人ぶった態度で話している。

「はい? 今まで、状況が全くつかめないんだけど?」

いつたいこの人は何を言い出すんだろうか。

俺は実際に今生きてるし。

「もう一度言います。あなたは死にました」

またもや何か言い出した。これはもうあれに違いない。

「……あー、宗教の勧誘なら結構です。俺、神様とか信じてないんで」

「あなたの目の前にいる神様の存在を全否定ですか?」

もう喋るのがめんどうになってきた。

ん? 今何かさらりと変なこと言わなかつたか?

「だ・か・ら、私が神様であなたは死んだんです

これはもしかしたら、あの病気かもしけない。

「小学生なのに厨二病ですか? 大変ですね」

「厨二病じゃないですよ。詳しく説明すると、あなたは私のミスで死んでしまいました。生き返らせるのは神様の規則的に無理なんですが前世の記憶を持つて転生させてあげよ。って言つてるんです」

むきになつて子供が怒り出した。スルーしたいが、無視するため
んどうそんだな。

「何となく分かった。でも、その詳しい説明を早く言つてくれないと分からないんだけど」

「言わなくてもそれぐらい察してほしいんですけどね
子供のくせに。と思つたがまた絡みがめんどくなるのも嫌なので
言わないでおこう。

「うん、俺が悪かったよ」

「えっ？」

さっきまでと俺の態度が違うから、なんかあわてだした。よし、
このまま押し切れば……。

「それにしても、神様って凄いですね。間違えて死なせたから転生
させてあげる。って言わなきゃ分からないのに。さすがは神様、
心の広いお方だ」

なんだか、褒められるのも満更でもないって様子で言葉を紡ぎだす。

「その優しさは胸に刺さるからやめてほしいんですけど……」

とにかく。とそこから続けて

「異世界になら転生させることができます。希望があれば規則の
範囲であれば叶えてあげます」

「そんなこと急に言われてもなあ……」

腕を組んで考えるポーズを取りながら、最近読んだ漫画から考え
をひっぱりだす。

「じゃあ、魔法とかある世界にしてくれ。それで、俺は前世の記
憶と一緒に魔法の知識も欲しい。あと、魔法の才能もな

我ながら、これはいかにも主人公最強とかになるんじゃね？って設定だと思つ。

「その程度なら出来ます。あつ、キャラメイクはめんどくさいんで、その体でいいですよね。なら転生をせます。いいですか？」

おこおい適当だな神様と思つたが、 小むく頷いておく。
その瞬間、田の前が真っ白になる。

そして田が覚める。

「知らない天井だ」

異世界転生のテンプレとか言つんじゃない。本当に知らない木造の天井なんだから。

ベッドから出て、すぐ近くにある鏡の側まで行く。
そして気づく。

「えつ、ひつれつて中学入学ぐらいの姿じやん」

そう、見た目年齢は12歳ぐらいだ。

そして、この世界で12年間生きてきた記憶で分かるが、今日は1
2歳の誕生日。

記憶を頼りにリビングに行く。

「あら、ハルおはよ！」

そう言つてくる女人は母さんだ。記憶の中でしか知らないから、少し他人な気もするが、間違いなく12年間一緒に生きてきた人だ。

「おはよう、母さん」

これも記憶にあつたいつも通りの挨拶だ。

リビングのソファには父さんらしき人が座っている。

「おはよう、父さん」

父さんは気難しい人なので「ああ」とだけ返して、再び読書に戻る。

父さんは2人掛けのソファに座っているので、俺はその向かって右にある1人掛けのソファに座る。

母さんは髪が長くて分からなかつたが、父さんの耳は長く尖つている。これは前世でのゲームでも見たことがあるエルフなのではないだろうか。

そう思いながら自分の耳に手を当てる・・・耳が尖っているではないですか。

あの神様は耳は尖らせたみたいです。

またしかにエルフの夫婦から生まれた子が人間でした。つてオチだと可笑しくて仕方がない。

あと昔の記憶にあつたが、小さい頃に父さんに自分だけ何で髪の色が違うのかを聞いていたが、その時の答えは「突然変異じゃないのか」だそうだ。

エルフは皆ほとんど例外なく金髪なのにだ。

その時は父さんも深くは考えていなかつたらしい。たまに銀髪のエルフも生まれるから、とのことだ。

「そりいえばハルカ、今日で12歳だつたな。お前の魔力量によつては明日からにでも、魔法の練習をしよう」

この世界では人も魔族も靈獸や魔物を除いた生物は、12歳になるまで体内に魔力を貯めるための器を作る。

その魔力の容器は12歳の誕生日の日に完成して、それから魔力が

貯まる仕組みなのだと聞いたことがある。もちろん記憶の中の話だが。

なので、今日から俺も魔力が貯まる。
ちなみに俺の前世での名前は姫神 悠はるかだつた。自称神様はそのままの設定的なことを言っていたので名前まで一緒にらしい。なので、母さんはハルと略し、父さんはハルカと呼ぶ。
なので、名前はこの世界では貴族にしかないのと、この世界での俺の名前はハルカと言うことになる。

「ハルカ、少し心を落ち着かせなさい」

父さんはどうやら俺の魔力保有量を魔法で見るらしい。

そのためには相手がリラックスしてるのが見やすいのだ。

「あ…くま」

なんのことだろ？ 父さんは魔法で俺を見てから、顔色がかなり悪くなっている。

「どうしたのですか父さん」

本気で何を言っているのか分からないので尋ねてみると、父さんは急いで立ち上がり、俺との距離を取る。

「俺はそんなに魔力の高い者を見たことがない。桁違いに大きすぎるので、その黒い髪と目も、全て悪魔の子だからだ！」

そう言って父さんはガクガクと震えながら、事情がよく分かっていない母さんの元まで駆け寄る。

この髪は突然変異だと気にせず言っていたのに、魔力の量だけで全てを否定しているようだ。

「父さん何言つてるんですか？俺は父さんと母さんの子です」

そう言いながら少しづつ距離を詰めていく。

「近づくな。いいか、俺達はしばらく家から出てこないから、その間に出て言ってくれ」

父さんはさう叫び、母さんの手を取つて走つて家を出て行った
また。

俺だけを残して……。

2日が経つても未だに帰つて来ない。

3日目が経つた頃に、やつと家を出て行く決心が出来る。

「フツ」

魔力が高すぎるのと、日本人の髪の色と田の色で追いつかれると考
えると笑みが溢れてしまつ。

着替え等の荷物を纏め、少々のお金を持って家を出る。

「さて、これからどうするかな……」

プロローグ 旅立ち（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。

評価・感想・お気に入り登録お願いします。

登場人物紹介

このページでは登場人物の名前、性別、種族、年齢、外見、性格、特技を書いています。得意魔法とかも増やすかもしれません。新キャラ登場毎に更新していくと思います。

ハルカ／姫神悠

性別：男
種族：エルフ

年齢：12歳

外見：黒髪黒目に耳が尖っている

性格：映画版のジャイアンとアニメ版ジャイアンの中間みたいなん？

特技：魔法

クレア

性別：女
種族：獣人（狼）

年齢：12歳

外見：肩よりも少し長い茶髪のストレート、赤目、狼耳、モフモフ

そうな尻尾

性格：ツンデレ？

特技：近接格闘（双剣）

1話　出会い

「クレア、村から10キロほど西に行けばエルフの村がある。そこで事情を説明して保護してもらいたいなさい」

「いや、お父さんとお母さんも一緒に逃げよ」

「ダメだ。父さんと母さんが時間を稼いでる間にクレアだけでも逃げなさい」

「もう時間がないんだ。これを持つて行きなさい」

そう言つてお父さんはあたしに貯金として置いていたお金を渡し、家の外で魔物と戦っているお母さんの所へ行つた。

つい30分程前まではいつもと変わらない日常を送っていた。

その日常を妨げる鐘の音、つまり魔物が出たとの合図があつた。魔物が攻めてくることは、珍しいことではない。今日も村の精銳の人達がすぐに倒して戻つてくると思っていた。

精銳の人達はすぐに準備して向かつたが20分後には全滅していたらしい。

人間よりも身体能力が大幅に高い獣人の精銳部隊を、20分で片付ける魔物など聞いたことがない。

そんなことが出来るのは、人間の中でも魔術師と呼ばれる人達が連れている賢獸。その中でも上位の賢獸が何体も集まつたか、中位以上の魔族が襲つてきたのだ。

そのことが分かつていて、精銳部隊が全滅と知つても、村の大人達は自分の子供を守るために戦いに行つた。

あたしも小さい頃から近接格闘は教えてもらっていたから、あたしも戦える・・・と思っていた。

それでも、あたしは無力なのだと、そのとき知った。大切な家族さえ守ることが出来ない。

そんなことで、強いと思っていた自分が恥ずかしいとも思った。これからはもっともっと強くなつて、大切な人を誰も失わないぐらい強くなる。

「お父さん、お母さん」
思わずそんなことを呟いていた。

もう姿を見ることも話すこともないかも知れない人のことだけが、頭から離れない。

途中で休憩したら、いつの間にか眠つてしまつていて朝になつていた。

魔物の出る森で朝まで無事に寝ていられたのは奇跡に近いだらう。だが、そんなことよりも12歳になつた日の朝を一人で迎え、誰にも祝つてもらえない。

そんなことしか考えられなかつた。

一晩寝ると頭も冷静になり、エルフの村に向かつてから、もう一度村を見に行こうと決める。

「あつ、起きてた。こんなとこで寝てたら危ないぞ」
目の前には黒髪黒目で耳の尖つたエルフの少年がいた。

「あつ、起きてた。こんなとこで寝てたら危ないぞ」
昨日の朝に家を追い出されて、ウロウロと彷徨っていたら、今にも魔物に襲われそうなのに、ぐつすり眠っている女の子を見つけた。少女は俺と同じぐらいの年齢だと思うが、その姿は人間のそれでも、エルフのそれとも異なっていた。

獣人

生で見るのは初めてだが、すぐに獣人なのだと理解できる。

肩よりも少し長いぐらいの茶色でストレートな髪、頭の上には柔らかそうな耳が一つ、赤い瞳、触るとモフモフしてそうな尻尾。これだけで獣人と判断するには充分すぎると思つ。

「あなたは……誰？」

警戒しているのか少しづつ下がっている。怖がらなくともいいよ。と言いたいところだが、言いつてしまつと確実に今よりも怖がるだろう。

「俺はハルカ、君は？」

名前を答えると少しは安心したようだ。まだ距離はある後ろに下がることになくなつた。

「クレア」

それだけ言われても、話が続かない。
ここは、どうすれば……

「どうして一人で森になんているんだ？」
これは聞かなくてはいけない質問だ。

おおかた山賊や魔物から逃げてたとかだらうが。

「あたしの村が強い何かに襲われて、お母さんとお父さんがあたしだけでも逃げなさいって・・・ぐすつ」

ようするに、村が何かに襲われて、お父さんとお母さんが娘を逃がすために戦いに行つたつてことだらう。

そんな相手なら、まず間違いなく両親は死んでいる。それが分かつてか少女は泣いてしまつた。

落ち着くまで待つてから、質問を再開する。

「クレアはどこまで逃げようとしてたんだ?」

「西に10キロほど行つたらエルフの村があるから、そこで保護してもらひなさいって言われた」

「なら、俺が案内するよ。俺は村を昨日追い出されたばかりだから近くまでしか行けないけどな」

「あり…がと」

クレアがそう言つのを聞いて、村のある方に歩く。

距離的には3キロほどなので、そう遠くない。

1時間ほどして近くまで来た時に、変な臭いがする。

「これは何かが燃えた臭いだな」

そう言いながら木の陰から村の方を見ると、一面が真っ黒になつていて、何がなんだか分からない。

生き物の気配さえないのだ。

「ここも……やられたんだ」

クレアが独り言をもらしている。

内容から察するに、獣人の村と同じようにエルフの村も襲われたと言つことだらう。

「どうする？ 獣人の村の方も見に行く？」

「……うん」

その返事を聞いて、東に向かって進む。

「ねえ、昨日あたしが寝てる間もハルカはずっと傍にいたの？」
起きた時に近くにいて「起きてた」などと言わると当然の疑問だ
ろう。

「寝る場所探して歩いてたら、暗くてよく分からなかつたけど、誰
か襲われそうなかんじだつたから助けただけだよ。起こすのも何か
嫌だつたから、そのまま寝させて、俺は魔物退治してた」

「そう……だつたんだ。ごめん。あたし、ハルカのこと怖い人だと思
つてた」

「いいよ、そのくらい。髪の色でよく怖がられてたし
思い出したくない過去だが、よく思い出せる。

アレは世間的にはイジメと言うのではないだろうか

よく怖がられてたと聞いて、クレアが氣まずそうな顔をする。
話さなかつたらよかつたと思うが、もう話してしまつたし、仕方な
い。

そんなことを話しながら、途中に休憩をいれていたら、4時間ほど
で獣人の村に着いた。

獣人の村はエルフの村と同じで、真っ黒の燃えた跡だけが残つてい
て、人の気配も感じない。
まるで人が全くいなかつたかのような静けさだ。

家の燃えた場所にはところどころに人が燃えた焼死体がある。
かなり燃えていて、もはや誰なのかも見ただけでは分からない。

そんな光景を見てもクレアは泣きそうなのを我慢してゐみたいだ。
意外と強いんだな。

「ねえ、クレア、俺はこれから人間がいる街に行つて、そこで暮ら
そうと思う。クレアはこれからどうするんだ?」

俺の質問にクレアはかなり悩んでいるみたいだ。

正直、このまま森に残つても魔物に襲われるだけだ。

「あ、あたしも街へ行く。ハルカと一緒に街に行く

「じゃあ決まりだ」

そう言って、家から拝借してきていた地図を持つて、一番近い街に
向かつて歩きだす。

1話　出会い（後書き）

2話でヒロイン登場ですね。タイトル通りで獣人の女の子出しました。

獣人の女の子は狼の獣人です。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録お願いします。

2話　人攫い？

「2人とも寝ちゃつたら、魔物に襲われちゃうんじゃない？」

自分の故郷のこともあり、少し心配しているようだ。

「大丈夫。半径50m以内には入れないよう」、結界と魔法無効化の障壁も張つておいた

少しでも安心できるように、なるべく笑顔で答える。

「そんな魔法が使えるなんて凄い。あたしと同じ歳ぐらいに見えるけど何歳？」

どうやら、12歳でこのレベルは使えないらしい。まあ神様に貰つたこの魔法知識があれば、昔からずっと出来たことのような感覚ができるのだ。

「一昨日12歳になつたばかり」

言つた途端にクレアがビックリしたような表情になる。

「あたしは昨日12歳になつたんだ。ハルカの魔法は親に教えてもらつたの？」

今のクレアは魔法に興味があるらしい。

まあ、それも仕方ないことだろう。

クレアは……両親を亡くしてゐるのだ、他の誰かに魔法を教わらなくてはならない。

「誕生日の朝に追い出されたから魔法は我流」

嘘は言つてない。ただの魔法知識です。

「あつ……え、えーっと……」「めん

クレアは素直に謝る。

別に謝るほどでもないのだが……。

「まあ、いいよ。気にしてないし」

またも笑顔で答えると、普通に笑顔で返していく。この笑顔見ると守つてあげたくなる。

あつ、妹みたいな意味だけ。

「ねえ、今度でいいんだけど、魔法教えてよ」

魔法は知識としてしかない。実際に教えることができるのかは分からぬ。

「教えるなんでしたことないけど、出来る限りでは教えるよ」

結局は負けてしまった。前世でも妹には甘かった気がする。

「ありがと。じゃあ、おやすみ」

クレアはそれだけ言つと、俺の方とは違う方を向いて眠りについた。それとともに俺も眠りにつく。

昨日は徹夜でクレアを守つていたから、眠たくて仕方がない。

そこで気づいた。

「昨日も結界張ればよかつた」

魔法の知識はあっても、頭は弱そうだ。

知識がある頭がいいではないのが証明されてしまった。

やつた。明日から魔法を教えてもらえる。
これで、お父さん達に追いつける。

獣人の村では、魔法で身体能力や武器を、更に強化して戦うことができれば1人前として認められるのだ。

今日はもう寝よう。

寝ていると突然、肩を誰かが掴む。

「えつ何？」

魔物は入れないように結界を張つてあるし、結界内ではハル力以外は魔法を使えない。

なら、この手はハル力に違いない。一体何の用事だろうか。

「何？ハル力」

顔を見ずに答える。

声を出した直後に、突然肩を掴んでいた手に力が入り、引き寄せられ口に布を巻かれてから、布の袋に入れられたら。

状況が全く理解できない。あたしは今捕まえられたのだろうか？

ハル力は眠りが深くて気づいてくれなかつた。

せっかく前を向いて生きようと思っていたのに……くそつ、あたしはどうなるんだろうか。

この世界で魔法が使えるのは、エルフ、獣人、竜族、魔族、貴族、一部の庶民と一部の魔物だけだ。

こんな人攫いをするのは、人間の山賊か人攫いだけだ。

恐らくは奴隸商人にでも売られてしまうのだろうでも、不思議とそれほど焦つたりしていない。

地面を少し荒らすことができたから、ハルカなら気づいて助けてくれるはずだ。

会つてまだ2日も経つてないから、ハルカがどんな人なのかは、まだ分からぬが、あたしが困つていると、なんだかんだ言つて助けてくれると確信できる。

「ハルカ」

無意識のうちに名前を呟いていた。

お父さんでもお母さんでめなく、ハルカの名前をだ。

「待つてる」

「クレア？」

朝起きるとクレアがいなくなっていた。

クレアが寝ていた場所には、多少暴れた形跡と数人の靴跡が残つていた。

「くそつ」

その形跡を見れば明らかだ。

山賊か人攫いにでも連れ去られたのかもしれない。

魔物や魔法に対する対策は万全だつたはずだが、そんなことにまで頭が回つていなかつた、全て俺の責任だ。

クレアを守つてやれなかつた。

クレアを攫つた奴らも憎いが、攫われてる横で気付かなかつた自分が憎い。

また、俺は独りなのか？

1人でいるのは割と好きだ。

だが、独りに耐えることはできないだろう。

独りは嫌だ。独りは嫌だ。独りは嫌だ。独りは嫌だ。独りは嫌だ。独りは嫌だ。

なら、どうすればいい？

そうだ

「クレアを攫つた奴を殺して、クレアを連れ戻せばいい」

クレアを一度と泣かせたくない。

それを妨げる奴は排除する。

まずは……クレアを捜す。

寝る前にクレアの魔力保有量を魔法で確認した。

その魔力を魔力探知で捜す。

「見つけた」

クレア以外に魔力の気配は……2つか。

山賊等に成り下がってる魔導士だ、たいした実力はないだろう。

「クレア……待ってる」

そう咳きながら魔法を使う。

風の翼を背中に宿す風の上級魔法。

魔法にはレベルと種類がある。

まずは四大属性の火、水、風、土

この4つは得意属性でなくとも、ほとんどの魔導士が使える。

その他には

雷、闇、光がある。

さうに、四大属性は得意属性でないと発動できない上位属性がある

火は炎、水は氷、風は嵐、土は大地だ。

その違いは、炎だと単純に同じ魔法でも、威力と規模が桁違いになる。

氷は名前の通りで氷の魔法が使える。

嵐も攻撃の威力が上がり、広範囲を殲滅させる点では炎と並び立つ。威力では炎に負けるが、発動からのスピードは圧倒的に嵐が速い。

大地は、土ではできることで地震を起こしたり、地割れ、隆起、陥没までできる。

それぞれが

火は水に、水は土に、土は風に、風は火に弱い。

それとは逆に

火は風に、風は土に、土は水に、水は火に優位になる。

特殊な属性の

光と闇も同様の優劣関係にある。

光は闇に、闇は光に弱い。

それと同時に光は闇に、闇は光に優位だ。

つまり、お互いが抑止力なのだ。

雷には苦手な属性も、優位になる属性もない万能属性だ。

さらに、それとは別に、自身に魔力を流して肉体を強化したり、武器を強化したりする無属性魔法もある。

話は逸れたが、俺は風の上級魔法を使って空を飛び、奴らのアジトに1人で乗り込む準備をしている。

距離にすれば20？ほど離れていたが、最大速度で飛んだので5分ほどで着いた。

アジトは2階建ての木造の建物で、人の気配は……20人程だろうか。

ドアを風の魔法で一気に切り刻む。

エルフは生まれながらに、全属性の魔法適性があるので、使えない属性はない。

それは、上位属性も例外ではない。

山賊らしき連中は、子供が1人で入ってきたので、驚いて開いた口が塞がらないといった表情をしている。

「クレアを返してもらうぞ。邪魔する奴には容赦はしない」
俺は何も考えずに山賊らしき連中に喧嘩を売っていた。

2話　人懼い？（後書き）

足跡とか評価もランキング見てたら、まだまだやからこれからももつと面白い作品が書けるように頑張っていきたいです。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願ひします。
評価、感想、お気に入り登録お願ひします。

3話 人攫い？

「クレアを返しても、ちつとも邪魔する奴には容赦はしない」
俺は何も考えずに山賊らしき連中に喧嘩を売っていた。

「がつははははは」

山賊の一人が子供が入って来るなり喧嘩を売ってきたからか、大声を上げて笑い出す。

それに続いて他の連中も笑い出す。（山賊らしい奴ら、ですが便宜上で山賊を表記します）

「ガキが一人で何しに来たんだ？」

近くにいた清潔感のない男が俺に話しかけてくる。
できれば、そんな顔で話しかけないでもらいたい。

「クレアを……お前らが昨日の夜中に攫つた獣人の女の子を返してもらひ」

全員が俺のことをただのガキだと思っているらしい。
まあ、12歳になつたばかりだと、魔法も上手く使えないだろうし、
この反応も納得はできる。

「残念だったな。ここにはもう居ないぞ」

近くで酒を飲んでいた、こちらも清潔感のない男が馬鹿にしたよう
に言つ。

「魔力探知でここにいるのは分かつてんだよ。ひとつと引き渡さね
えと全員殺すぞ」

こつこつ連中は一度痛い目に合わないと分からぬだろうが、一度
は忠告をしておく。

「ガキ一人でこの人数の大人をどうしようつて言つんだ？」
ようするに魔法は使えてもガキはただのガキ、痛い目合つ前に帰れ。
とこうことだろつ。

「ガキだからつて書めてんじやねえぞ」

なるべくドスをきかせた低い声を意識して言つ。

前世ではよく喧嘩してたからか、喧嘩を売られると何故かかつてしまふのだ。

ちなみに前世での趣味は料理と喧嘩早いのに家庭的な一面も持つていたのは秘密だ。

「くつ、おもしろいなガキが。特別に俺が相手してやるよ」
そう言つて近くにいた、これまた清潔感のない男がやつてくる。
ここには清潔感のない男しかいないのか。と発狂したくなるぜ、ま
つたく。

「10分で片付けて」
「ウォータースライサー」

そこまで言つた男は、台詞を呪文で中断され、その後にはもうす
でに一言も喋れなくなっていた。いや、喋れなくした。

この世界の魔法はイメージさえできれば呪文は必要ない。
だが、呪文と言うよりも魔法の名前を言つた方が明確なイメージが
しやすい、そのため呪文と言う形で魔法の名前を言つ。

俺の「ウォータースライサー」が、男の手に握られていた斧の刃の
部分を切り落としたのだ。
口を開いて言葉も出ないかんじだ。

「「」のガキが…、おい、囲んでやつちまえ」

斧を切られた男が全員に指示を出す。どうやら山賊の中でも意外を地位の高い奴だつたらしい。

「嘗めてんじやねえぞ」

「死ね、くそガキが」

「生きて帰さねえ」

「奴隸商人に売り飛ばしてやる」

……総じてボキヤブラーーが貧困なこと、この上ない。

全員バカじやねえか。

まあ、この世界じや教育を受けられる人数は限られてはいるが……、こいつらの親は何してたんだ。

そんなことを考えながらも、呪文を唱える。水の上位魔法の氷の魔法の呪文を。

〈冰雪地獄アイスヘル〉

それなりの魔力は消費するが、範囲はこのフロア全面で、威力は俺意外の全てが凍りつく。

呪文を唱え終わつてすぐに、辺り一面が氷の世界に変わった。全ての動きが停止する。

人など一瞬で凍りつく。

俺は火の魔法で体温を保持しているので、全く問題はない。

山賊の全員、ざつと見て30人ぐらいが、呪文を唱えた直後の武器を持つたり、持とうとした姿勢で凍りついている。

全員が凍りついたのを確認して2階へと歩を進める。

2階には魔力の気配が3つ。一つはクレアであとの2つは山賊の物

だ。

2階の人の気配は魔導士を除いて8つほど。
おそらく幹部クラスの連中だろ？

2階には風の魔法で空を飛び進む。

踏むと作動する罠があつたりすればめんどくさいからだ。

2階にはドアが2つ。

クレアがいる方は分かっている。

階段を登つて右にある部屋のドアを風の鎌鼬で切り刻む。

中には魔力はないがボスのような男が1人と、魔力を持つた者が2人とクレアがいた。

「クレアは返してもらひや」

空中に浮いたまま、相手に言ひ。

「フツ、下の雑魚共を倒してきたのは褒めてやるが、ここまでだつたな」

ボスのような男がそう言ひと、2人の魔導士がボスの前に立つ。

「魔導士は2人でいいのか？」

少しバカにしたような口調で問いかける。

「貴様のようなガキ1人にボスが出るまでもない。それに俺達だけで十分だ」

向かつて左に立っている少し男前の男が言ひ。
イケメンは死んで詫びるべし。

「貴様のような奴は俺たちの双子で十分だ」

どうやらこいつらは双子らしい。

後から言つた右に立つてゐる奴は、最初に言つた兄つぽいイケメンのセリフと言いたいことが同じじゃないですか。
もっと積極的になりますよ。

それに、弟つぽい奴の顔は非常に残念だ。

双子のくせに片方がイケメンで、もう片方がブサメンって可哀想すぎる。

ファイヤーボール
<火弾>

イケメンの方が言つと、目の前に火の玉が出来て、俺の方にもうスピードで飛んでくる。

ウイング
<風>

ブサメンの方が言つと、何もないがただの風が吹いた。
そして、その酸素をうけてか火がさつきよりも大きくなる。

火の魔法は風を受けると大きくなつて速くなるらしい。

これは勉強になつた。

ウォーターウォール
<水壁>

空氣中から水分を集めてきたのか、周りから水分が集めてきて水の壁を形成する。

火の玉はそれにあたつて、ジューっと音を発してから消え去る。

そこで、新たな魔法を思いつく。

アクティブ
<活性>

発動とともに、体を電気が走るような感覚が襲う。
雷の魔法で、生体電気を作りだし、それを体に流す。

神経伝達スピードが桁違いに上がり、脳内神経伝達物質の活性化。

さらに、運動神経にも生体電気が働きかけ、筋力も上がる。単純に言えば、危険感知、攻撃力、スピード、反射神経が桁違いにパワーアップしているのだ。

おそらくは使つた後は体が痛むだろうが、治癒の魔法をかけばいい。

活性化した脚力で、一瞬でイケメンの背後に回り込む。

<乾燥>

イケメンの男の体から水分が一瞬で体の外に出ていく。死なない程度に水分を残しているが、脱水症状には間違いなくなっている。

<鎌鼬>

それを見て、ブサメンの弟が風の鎌鼬を放つてくる。

<乱気流>

風の上位属性である嵐の乱気流によって、鎌鼬の風が飲み込まれて消滅する。

<凍結>

ブサメンを凍らせて動けなくする。

最後に残つたのは、ボスのような男と、隣の部屋に8人いた幹部クラスだ。

いつのまにか幹部クラスの連中は後ろに来ていた。戦闘い集中しすぎて全く気付かなかつた。

<嵐壁>

嵐で竜巻を作り、その中に幹部クラスを全員閉じ込める。

「うわあ」

嵐壁の中から叫び声が聞こえる。

恐らくは、嵐壁から出ようと突っ込んだのだろう。

嵐壁の中は鎌鼬のようになつていて、触れるだけで身が切れる。

タワー・フレイム
＜炎塔＞

火の弾を飛ばし、着弾点から炎が上に吹き上げ塔のようになる。それを嵐壁にぶつけたので、嵐壁で炎が大きく燃え上がり、巨大な炎の竜巻になる。

中からは叫び声が聞こえてきたが、中にいた連中は、けつこう重度の火傷を負つただろう。

残りはボスっぽい奴の1人だ。

そう思い振り返ると、そこには誰もいなかつた。正確に言えば、繩で手足を縛られて、口には布を巻かれたクレアだけがいる。

ボスは逃げたらしい。

気配探知を使えばすぐに見つかるが、クレアも無事みたいだし問題ない。

ハンドカッター
＜手刀＞

手に鎌鼬を帯びる。

その手刀で縄を切り、口の布を切断する。

「クレア無事か？」

これが地だが、心配そうな表情で尋ねる。

「大丈夫…だよ」

何だかクレアの顔が赤い。もしかしたら何かされたのかもしない。

「どうした？何かされたのか？」

セツキよりも心配しながら顔を近づけて聞く。

「ほんとに何もされなかつたし、あたしは大丈夫だから」
セツキよりも顔が赤い氣がするのは、氣のせいではないだろう。
だが、本人が何もないと言つていて以上は、これ以上は聞かないで
おく。

クレアが無事なのを確認して、

クレアの重力を軽減グラビティダウン

重力軽減グラビティダウン

クレアの重力を軽減させ、クレアをお姫様抱っこする。

「ひらり、降ろして！」

クレアは顔を真っ赤にしながら、俺の胸をぽかぽかと叩いてくる。
そんな声は無視することにした。

エアーウィング
<風翼>

空を飛んで壁を壊して、そこから外にでる。

「クレアが無事でよかつた」

空中ではあるが、笑顔でそう言つと、クレアは顔を真っ赤にして俯いてブツブツ何かを言い始めた。

「あんなかっこよく助けて、そんな笑顔するなんて反則じゃない」
声が小さすぎて全く聞こえない。

「『めんクレア、聞こえないから、もう少し大きい声で言つてくれ

申し訳なさそうに言つてみると

「ちゃんとドアから出なさい。って言つたの…」

今度は大声で叫ばれる。

「分かつた分かつた分かつたから、そんなに大きく言わなくていいよ」

耳を抑えたいが、クレアをお姫様抱っこした姿勢からでは塞げない。

「…ったく、全然分かつてないじゃない」

またも、何を言っているのか分からなかつたが、また聞き返すと呼ばれるかもしれないのに、今度は無視しておく。

クレアの救出も昼過ぎに終わつたので、そのまま街に向けて歩くことにした。

3話 人扱い？（後書き）

やつとクレアをツンデレにできそうな気がします。
ツンデレって難しいですね（^_-^）

この先も書ける自信がいまいち持てないですww
でも、頑張つて更新していきたいので、よろしくお願いします。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録お願いします。

「ねえハル、あとどのくらいの距離あるの？」

しばらく歩き続けたので、クレアは疲れが溜まっているらしい。あと、今日の毎に山賊っぽい奴らから助けて以来、ハルカではなくハルと呼ぶようになった。

まあ、前世でも呼ばれていたし全く問題はないのだが。

「この地図では、あとどのくらいだから……そのまま着く」前世から頭が悪かったので計算は苦手なのです。

「えー、もう歩けない」

とぼとぼと歩きながらクレアがぼやくが、歩けないなり。アレしかない。

「じゃあ、空飛んでく？」

空を飛べばすぐに着きそうな気がする。

「いや、無理。精神衛生上よろしくないので遠慮させてもらいます」赤面しながら言つてくる。

魔力はまだまだ残っているのだが、アレは難しい魔法みたいなので目立つのはあまり好ましくないだろ？

俺が後ろにいるクレアの方を見つめると、クレアの顔が急に青ざめて、口をパクパクさせ始める。
まるで金魚じゃないですか。

そして、俺は正面に向き直つて、クレアの見ていたものを見ると、

俺も口をパクパクさせていた。

八岐大蛇がいたのだ。

までまでまで、八岐大蛇は8つの頭と8つの尾を持っている、目の真つ赤な架空の伝説上の生物のはずだ。それが、何故ここに……？

そんなことより、相手でかいんですけど……。

俺とクレアは1mと50cmぐらいしかないのに、八岐大蛇は軽く10mぐらいあつて見てるだけでも怖いです。

「えーっと、お帰りください」
そう言いながら頭を下げる。
それしか思いつかなかつたのだ。

3秒ほどの沈黙の後に、八岐大蛇の頭が一つ襲い掛かってくる。

ストームウォール
<嵐壁>

俺とクレアの周りに展開させる。

頭が嵐壁に突っ込み、貫通することなく頭は引っ込む。だが、嵐壁はさつきの一撃で消滅する。

それを見てか、今度は頭が8つとも襲つてくる。
正直、嵐壁とかでも防げる気が全くしない……。

そこで、神様から貰つた魔法知識の中にある、防御力最大の魔法が思いつく。

<聖域>
サンクチュアリー

この魔法は、自分の指定した範囲にまで、球状に広がり、敵意を持つ向けられる攻撃を完全拒絶する、光属性の最上位魔法だ。これにより八岐大蛇の攻撃を完全に防ぐ。

そこで、八岐大蛇が少し距離を取り、8つの頭全てから炎属性の魔法が放たれる。

ただの広範囲への息ブレスだが、聖域の範囲外は一瞬で一面焼け野原だ。

さっきの嵐壁に突っ込んでも傷がついていないところを見ると、八岐大蛇の鱗はかなり硬いらしい。

八岐大蛇は炎属性を使ったので、炎属性の攻撃には耐性がついているだろうし、いまいち効かないだろう。

氷の属性でも、全身を凍らせる自信がない。

嵐の属性も効かないことは嵐壁で分かっている。

大地の属性も地震を起こしたりしても、体勢を崩す程度で決定打には欠ける。

光の属性は攻撃もあるが、今は決定打に使える魔力量が残っていない。それほどまでに、聖域で魔力を使っているのだ。闇属性も同様の理由で使えない。

残すところは雷。

天から降る雷の<落雷>を使えばいい。

魔力だけで作り出すには魔力量が不安なので、他での補うか……。

<灼熱地獄>
バーニングヘル

範囲攻撃なので、範囲を八岐大蛇の周辺に指定する。

発動の直後に少し温度が高くなつた気がする。

八岐大蛇の周辺の温度はどんどん上がり、水分も一瞬で蒸発してしまつほどだ。

＜水矢＞
ウォーターアロー

水で作つた矢が無数に八岐大蛇の方に飛んでは蒸発する。

そして、上空には上昇気流が発生して積乱雲、つまり雷雲ができる。

雷が鳴つているのを確認して、右手を空に向ける。

＜落雷＞
サンダーボルト

目の前が真っ白になり、轟音とともに八岐大蛇の体が焦げていた。鱗は全て溶けていて、全身も酷い火傷だ。

もつほとんど魔力は残つていない。

これが、最後の一撃になるかもしれない。

最後に使う魔法を決める。

＜乾燥＞
ドライ

魔力のほとんど全てを籠めて使つた魔法は八岐大蛇の全身に作用する。

八岐大蛇の体からは水分が抜けていき、かなり小さくなつた気がする。

水分を抜かれて倒れ、完全に死んだ八岐大蛇の方で何かが光る。

最後の力を振り絞つて、ソレの方に歩を進める。

ソレを手にとると、それが何なのか分かつた。

昔の神話で聞いたことがある。

八岐大蛇の尾から出てきた剣……草薙劍

その柄を掴んだ瞬間にかすかに剣から魔力を感じる。

最初に収まっていた鞘に剣を收める。

「ハル、大丈夫？」

心配そうなクレアが駆け寄つてくる。

傷はついていないが、魔力を大量に消費した。

落雷は雷の最上位魔法で、普通の人間は雷の適性を持つても、魔力が足りなくて発動させれない魔法だ。

エルフでも、魔力をフルに使って小規模な落雷がやつとの魔法なのだ。

それほどの魔法を使えば、魔力切れも普通に起こす。

「大丈夫。それよりドロップアイテムゲット」

笑顔で草薙剣を見せると、クレアは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「いやー、それにしても凄かったね。今の」

後ろの方から男の声が聞こえる。

話しかけてきたであろう男の周囲には、他に3人の男がいる。いずれもかなりの武装をしていて、冒険者といったところだろうか。

「……どうしたんですか？」

人間に会つのは前世以来なので、妙に緊張してしまつ。クレアに至つては、俺の後ろに隠れてしまつた。

「いや、この大蛇ね、俺達が討伐依頼を受けてたんだけど、それが君たちみたいなエルフと獣人の子供に倒させてたから、声をかけただけだよ」

中心にいた大剣を背負つたけつこう若い男が言つ。

「それで……、俺達に何の用ですか？」

何かの駆け引きでも行われているかのよつな、緊張の重い空気が流れる。

「この大蛇は俺達が倒したつてことにしてくれたら、報酬の半分をあげるよ」

どうやら、俺が冒険者ギルドに討伐したと言つたら貰える賞金の半分を寄越せということらしい。

まあ、あっちが正式に依頼を受けていたのだから、悪い条件ではないだろう。

それに、俺達みたいな子供が倒したと言つても、人間の大人達は信じてくれない氣がする。

俺も普通のエルフの12歳だったら、全く勝てなかつたわけだし。

「ハル……どうするの？」

クレアが後ろから心配しながら尋ねてくる。

「心配しないで。……いいですよ」

クレアの頭を撫でながら、そう男達に伝える。

「よし、なら今から街に向かうから乗りな」

男はそういうながら、後方にある馬車の方を親指で指しながら告げる。

どうやら、この人たちと出会つたことで俺の運命は少しづつ変わつていきそうな気がする。

4話　八岐大蛇（後書き）

話が自分でも分かるぐらいグダグダなりました。

超展開すぎてワロタって、自分で言つてしまつほどです。

こんな駄文ですが、これからもよろしくお願ひします。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願ひします。
評価、感想、お気に入り登録もお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2558y/>

エルフの少年と獣人の女の子

2011年11月9日19時18分発行